

Title	Helen Parkins and Christopher Smith (ed.) ; Trade, traders and the ancient city
Sub Title	
Author	真下, 英信(Mashimo, Hidenobu)
Publisher	三田史学会
Publication year	1999
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.68, No.3/4 (1999. 5) ,p.183(407)- 188(412)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19990500-0183

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Helen Parkins and Christopher Smith (ed.);
Trade, Traders and the Ancient City; pp. XIV+268
London and New York 1998, ISBN 0-415-16517-2

真 下 英 信

本書は、商業、商人そして彼らが居住する都市の三者の関係を検討しながらアッシリアからローマ帝国にいたる時間的にも空間的にも広大な世界を考察し、古代世界全体における商業の重要性を提示する目的で編纂された論文集である。これまでにも古代の経済活動に関して幾多の研究がなされて来たが、新たな考古学的研究成果を十二分に攝取し、従来の歴史的枠組みに突破口を切り開いたとの意気込みのもとに各論は執筆されている。因みに、日本の古代史研究でも、この半世紀の通説の幾つかは最近の多量の銅鐸や銅鏡の発見などにより、根本的な再検討の必要に迫られていることは周知の事実である。

古代における経済と都市の関係、より具体的に言えば古代都市で商業が占める政治的経済的な役割について、実は十九世紀以来今日なお綿々と論争が展開されている。

この問題、言わば近代派古代派論争について、評者はすでに本欄（六三卷二号 pp. 103-105）で要約紹介しているので読者は参考されたい。本書の各々の論考は商業の位置付けに関して、当然その陰影を異にする。しかし、基本的には一九七〇年代からほぼ定説化していった M. I. Finley (*The Ancient Economy* 1973) の見解に異議を唱へ、政治経済的にも文化的にも古代世界での商人、商業の役割を重視し、商業は時の政治的経済的要因と不可分であるとする思想が本書全体に通底している。かかる近代派再旗揚げとも言える主張故に、本書は一読に値すると評者は考えたので以下に紹介したい。

本論集は、一九九五年七月に St. Andrews 大学で本書と同名のテーマで開催された会議での発表草稿をもとに執筆された論考を中心に、次の十一章からなる。

Jeremy Paterson

- 1 Time for change? Shaping the future of the ancient economy

Helen Parkins

- 2 The Old Assyrian merchants

Amélie Kuhrt

- 3 Traders and artisans in archaic central Italy

Christopher Smith

- 4 Trade on the Black Sea in the archaic and classical periods: some observations

Gocha R. Tsetskhladze

- 5 Ceramics and positivism revisited: Greek transport amphoras and history

Mark Lawall

- 6 The grain trade of Athens in the fourth century BC

Michael Whitby

- 7 Land transport in Roman Italy: costs, practice and the economy

Ray Laurence

- 8 Trade and traders in the Roman world: scale, structure, and organisation

- 9 Trade and the city in Roman Egypt
Richard Alston

- 10 Trading gods in northern Italy
Mark Humphries

- 11 Ancient economies: models and muddles
John K. Davies

以下、各章の内容を簡単に述べね。

第一章は、本書全体の導入部分にあたる。古代都市と経済の研究は精力的に進められてはいるが、結果として近代派、古代派あることはマルクス主義等のイデオロギーに分解し袋小路に入り込んだ状態にある。これを打開するためには近年得られた様々な成果、とりわけ考古学的成果を中心的に問題を再検証する必要がある。M. I. Finley 为代表的古代派は、農業が古代の主たる生産様式で、生産様式の生産を発展させる觀点はあまりなかつたす。だが、近年の研究結果を鑑みると、かかる古代派的発想は今や全面的なホーバーホールを不可欠である(p.12)。他方、Rostovtzeff などに代表される近代派は、かかる古代派の見解に反対してゐる。しかし、両者はいずれのモ

デルも、ある面では完全に不十分でありかつ有益とも言えない。以上の考察を前提に著者は所収の論考を簡潔に紹介する。

第二章は、前一九〇〇—一八三〇年頃のメソポタミアの町 Ashur の商業活動を考察し、その活発さと重要性を強調する。

Ashur の王の権力は、宗教や司法などの一部に限定され、大商人達からなる町の会議が政治的実権を掌握し、経済政策をも実施していた。イラク北部に位置するこの町は、この地域の商業ネットワークの中心的な役割を果たしたのみか、千二百キロ以上離れたアナトリアに商館を持ち、中世ヨーロッパの商業革命の時代に匹敵する規模の交易を行っていた。彼等商人のある者が我々の言うエコノミックアニマル的活動をしていたことを示唆する資料を引用したのち、古代経済の性格をめぐる議論をするにあたり、ギリシャ・ローマの歴史家はもつとアッシリアの資料を読むべきであると著者は強く主張する。

第三章は、前九一六世紀、中部イタリアの都市の成立期に商人、手工業者とともに陶器とテラコッタ職人の果たした重要性が指摘される。

著者は商品のみか職人も移動していた事実に着目する。

職人が将来した商品と並んで、彼等の知識が都市の形成に必要な都市のアイデンティティとイデオロギーを提供した。前七一六世紀、都市化の進展と並行して交易が発展し、外国から新しい物品や商人や職人さえも渡來した。フェイディアスがアテーナイの民主制を象徴したように、彼等職人達が創作した絵画、彫刻、祖先の彫像、広場の公共記念物は都市の有力者に権威を付与したのである。本章では、従来軽視されていた職人が新たな視点から脚光を浴びている。

第四章は、ギリシャと黒海地域の交易を検討する。

穀物、金属あるいは奴隸を求めてギリシャ人は黒海方面に入植し交易を継続していくとするこれまでの通説は誤りである。古代の資料も今日の学者も共にアテーナイ経済における穀物貿易、特にポンツス地域の貿易の重要性を誇張している。金属はギリシャ本土に産出した。ミレトスが原料の金属を求めて植民地を開拓せねばならない理由はなかった。奴隸にしても黒海地域は中心的供給地ではなかつた。原住民の支配者とギリシャの植民者の関係は、交易と言うよりも、税あるいは贈与の関係に基づいていた。ロシア人と思われる著者は、最新の考古学的成果とロシア語の文献を十二分に利用して本章を執

筆し、古代世界での交易活動の再検討を強く求めている。本章はギリシャ人の植民活動を考察する時の必読の一編であると言える。

第五章では、キオス島で生産されたアンポラの形態、分布等の詳細な検討から、この島の政治動態の解明が試みられる。

著者はアンポラの符牒の変化、国外で発掘されたアンポラの定量的変化を詳細に検討した結果、三回にわたる大きな転換期を確認する。そしてこの転換期に、ペルシャ戦争の影響、キオスの貴族政治の衰退と民主制の発展、そして民主制の衰退と貴族勢力の回復という政治的経済的变化を著者は読み取っていく。本章は新考古学の典型的な手法を用いた一論である。だが、相異なる二つの面での変化が時間的に同時であつたとしても、両者間に必然的な因果関係が存在するのか否かは必ずしも自明ではない。著者も認めているように、より慎重なクロスチェックが必要であろう。

第六章は、前五一四世紀のアテーナイの穀物輸入の実態が考察される。

食料を自給出来なかつたアテーナイは当時多量の穀物を輸入しており、この事実はアテーナイの外交をも規定

していたと見るのが通説である。ところが、近年 P. Garnsey は一連の論考（例えば、最近翻訳された松本宣郎・阪本浩訳『古代ギリシア・ローマの飢饉と食糧供給』参照）でこの見解を否定し、アテーナイは飢饉などの異常事態が発生しない限り、前四世紀は別にして、基本的に穀物を自給していたと主張している。本章は、穀物生産量、人口数そして穀物消費水準等を綿密に再検討し彼の見解を否定し通説を擁護し、豊作時でもアテーナイは穀物輸入の必要に迫られていたとしている。穀物自給の問題は様々な不確定要素の推定を前提とする難問である。

第七章は、古代ローマにおける道路の機能が考察される。

本章では、道路は政治的軍事的なもので陸上輸送費は高額故に古代イタリアでは専ら海上輸送が利用されていたとする C. A. Yeo から A. H. M. Jones そして M. I. Finley に続く通説が批判される。著者によれば、海陸輸送は相補的で両者の輸送費に大差はなく、前二世紀以来イタリアは陸上輸送に基づく農業生産組織を発展させ、ヴィラの所有者が生産物の輸送を容易にするために道路網の改善に尽力しており、ヴィラと都市との関係は緊密

で、道路網の発展が経済の進展を齎した。

第八章は、商業発展とローマ帝国のそれの関係が検討される。

帝国の拡大に起因する交易機会の拡大がローマの経済発展を刺激した。商人は決して周辺的な存在ではなく、中心的な役割を果たした。市場を認めず商人を周辺部に押しのけるは『M. I. Finley の亡靈』(p.157) の影響である。彼の商業軽視は、ギリシャをモデルにし考古学的成果の無視に起因する。人が市場の創設や拡張の機会を利用すること自体は、何も現代に限られた事象ではない。上流の人士達が残した資料では、商人達の活動は片隅に追いやられているので、商人達の活動の痕跡が残る法律、碑文そして考古学資料に注目する必要がある。著者は徹底した近代派的論理を展開している。なお、彼が経済の発展原因とその限界の考察で企業心という極めて個人的な要因を強調しているのは、注目に値する。

第九章は、ローマ時代のエジプトの都市と商業を扱う。著者は様々な資料から、古代都市を単純に消費都市と定義するのがいかに不十分であるかを実証する。ある地区は農業的であるが、貨幣経済が浸透しており、流通は実物と貨幣同時であった。農村部にも時には市場があつ

たが、都市に必ず市場が存在したわけではない。都市の生産は高度に専門化していたが、都市一極を中心とした交易ネットワークでは存在していなかつた。経済活動は農村、都市の両者を一体とした重層的な性格を持ち、加えて地域差が認められる。

古代都市を单一の理論で括ることの至難さを痛感せせる章である。

第十章は、北イタリアの Aquileia を事例に、キリスト教の普及と商業活動の関係を論じる。

商人の活動がキリスト教の布教に貢献したとの見解はこれまでにも指摘されている。しかし、著者によれば、宗教の拡大は単に商人個人の活動によるのではなく、商品の流通に絡むより広い社会的な基盤全体、いわば商業ネットワークが重要な役割をしていて。商業は社会全体の中に深く埋め込まれているのである。キリスト教の如き個人的な宗派の拡大に役立つ文化的多元性を商業ネットワークが提供したのである。マニ教、ヒンズー教そしてイスラム教のいずれも宗派の拡大にも同様な事象が見られる。古代地中海世界を形成していた社会的経済的政治的な全体組織の文脈の中でのみ人はキリスト教の拡大を理解できる。

第十一章は、以上の事例研究を基礎に古代世界の経済を統一的理論で理解する試みが提示される。

展開しているので、読者は自分の関心ある論考のみを読むことも可能である。

(一九九八、八、一一一)

古代経済史の考察は、広く拡散するスペクトルの如く散在する個別研究の集積からなる。これまでにもかかる分散状態を統一しようとする試みがなされてはいるが、問題は結局袋小路に迷い込んでしまっている。著者は、この点を歴史的に回顧した上で、経済史を三段階で理解する独自のモデルを提案する。評者の理解する限り、このモデルは、章題を捩つて表現すれば、『モデルにして混乱』でしかないが、このモデルがより多くの読者に検討され生産的な成果が生まれることを期待したい。特に、数学を学んだ人が古代経済史の研究に手を付けることを切望する。何故なら、著者も脚注で示唆してるように(p. 251 n. 40)、経済史をフラクタル理論で考察すれば面白い成果が得られるのではないかと評者も感じるからである。また、古代アジアを考えると問題はどうなるのか、中国や日本の古代商業を熟知した識者の本書の読後感を是非伺いたい。

以上の内容紹介から分かるように、各章はそれぞれ独立した論文と言えるもので全体を通読せねばならぬものではない。各論とも極めて専門的な知識を前提に議論を